けんせつのでんせつ シリーズ47

金沢の「七つ橋渡り」

はじめに

石川県金沢市の中心市街地は、浅野川と犀川に挟まれており、そこから引かれた辰巳用水や鞍月用水、大野庄用水などが縦横に走るため、大小さまざまな橋が架けられています。そのような土地柄からか、金沢では「七つ橋渡り」という民間行事が営まれており、浅野川に架かる橋を七つ、作法通りに渡り切ることができれば、「他人にシモの世話をしてもらうような病気にかからない」、つまり寝たきりにならないと言います。

今回は、この「七つ橋渡り」の起源を考えるとともに、なぜこのような願掛けに橋が使われるのかを考えてみたいと思います。

「七つ橋渡り」の作法その1

まず「七つ橋渡り」の作法をご紹介しましょう。例えば「浅野川に架かる七つの橋すなわち常磐橋・天神橋・梅の橋・浅野川大橋・中の橋・小橋・昌永橋などを、秋の彼岸の中日の前日の夜12時から男性は真新しいふんどしかパンツ、女性も真新しい白い晒のおこしかショーツをつけて渡る。その際一言もしゃべってはいけない。そして家に帰ったら身につけていた下着を7日間つづけて水洗いをして、最後に干してから白い紙に包んで、紅白の水引をかけて箪笥の底にしまっておく」。

浅野川に架かる金沢を代表する橋「浅野川大橋」（石川県金沢市）

「七つ橋渡り」の作法その2

または、「彼岸中日の夜半、女性は白色の新しい下着を身につける。七つの橋を渡り終えるまで無言を守る。同じ道を通らない。下着は7度水に浸して洗い、それを奉書紙で包み紅白の水引をかけ、次の彼岸まで箪笥に納めておく。水引をかけた下着は『死後お棺の中に入れてほしい』と嫁さんに頼んでおく等」。

「七つ橋渡り」の作法その3

その他、「4人連れで夜12時に出る。その時女は朝洗ったオコシ、男はフンドシをし、一週間繰り返す。途中でしゃべってはならない。（中略）一週間済んだら、オコシ・フンドシに半紙を掛け箪笥に入れる」。

この三例を比べてみると、夜中に浅野川に架かる七つの橋を無言で渡ること、きれいな下着を身に着けること、その下着を箪笥に入れることは共通しますが、橋渡りを続ける日数や、下着の処理法などに差異がみられます。これらはいずれも『金沢市史 資料編14 民俗』の各章から引用したもので、それぞれ執筆者が異なるため、このような差があるようですが、要するにまちまちで昔から定まっていた作法とは思えません。

大正期の「七つ橋渡り」

ここで大正期の「七つ橋渡り」を見てみましょう。砺波和年氏の『百年のあとさき「米澤弘安日記」の金沢』は、米澤弘安という金工職人が残した日記をもとに、明治末から大正期の金沢の習俗を紹介した書籍ですが、大正12年（1923）8月24日の日記に「弘坊百日咳平癒祈りの為母は、天神橋より中嶋橋七橋を渡らる（后）」とあります。弘坊とは米澤弘安の長男のことで、弘安の母親が孫の百日咳平癒のために「七つ橋渡り」を行ったというのです。しかも夜半ではなく日中午後であり、祈願の内容も「寝たきりにならない」などと定まったものではありません。作法の詳細は不明ですが、日中に行っていることなどを考えると、全体的に『金沢市史』が伝えるものより簡単なのではないかと思えます。つまり、彼岸の夜半や「寝たきりにならない」などは、後付けされたと考えられ、きれいな下着云々も恐らく同様でしょう。

「万治の石仏」のお参りの仕方

ところで、長野県下諏訪には、「万治の石仏」という頭がモアイのような変わった形をした石仏がありますが、この石仏の横に数年前から次のようなお参りの作法を記した看板が立てられました。「一、正面で一礼し、手を合わせて『よろずおさまりますように』と心で念じる。二、石仏の周りを願い事を心で唱えながら時計回りに三周する。三、正面に戻り『よろずおさめました』と唱えてから一礼する」。

これは地元の観光協会と商工会議所が、町おこしの一環として石仏を活用するために新たに提唱した後付け作法のよい例で、私は民間儀礼におけるその形成過程の一例を見た思いがしました。

提唱された作法で「万治の石仏」の周囲を回る人々（長野県下諏訪町）

浅野川の架橋年代

このように民間儀礼の作法が後付けされていくものであれば、それが少ないと思われる弘安の母が行った大正頃が、「七つ橋渡り」が誕生した年代だと考えられます。そこで浅野川の架橋状況を見てみると、天保2年（1831）の地図には、浅野川には4橋しか書かれておらず、さらに明治13年（1880）になると8橋が架かっていましたが、そのうち5橋は一文橋と呼ばれた有料の仮橋なので、「七つ橋渡り」が庶民の間に広まるには適さなかったように思えます。

明治42年（1909）になると、正式な橋が7橋架かっていましたので、ようやく条件がそろいました。このように橋の数からいっても、明治末期以降でなければ、浅野川での「七つ橋渡り」は難しかったのです。

大正11年の洪水

また大正11年（1922）8月には、豪雨によって洪水がおこり、浅野川に架かる橋はほとんど流失してしまいました。米澤弘安の母親が、「七つ橋渡り」を行ったのは、その1年後ですから、その頃には復旧が進んで七つ以上の橋が再び架かっていたのでしょう。

鳥居潜り

『百年のあとさき「米澤弘安日記」の金沢』の著者である砺波和年氏は、明治の初めころから金沢で流行した「鳥居潜り」という行事が「七つ橋渡り」の原型だと推測しています。「鳥居潜り」は、氏神の祭りの前夜に、石製の鳥居を七つ潜れば幸いがあるというものだそうで、「七つ橋渡り」とコンセプトが似ています。

昭和2年（1927）に刊行された『稿本金沢市史・風俗編 第一』を見ると、「鳥居潜り」は記されていますが、「七つ橋渡り」の記載はなく、大正から間もないこの頃には、まだ民間行事として認知されていなかった可能性があります。これらのことから、「鳥居潜り」が「七つ橋渡り」へと推移したとすれば、その時期は浅野川に七つ以上の橋が架った明治の終わり頃、または洪水後の復旧によって再び橋が架け揃った大正12年頃のことだったのではないでしょうか。

おわりに

さらに鳥居から橋への変化は、民俗学的には十分あり得る話です。なぜなら鳥居は「聖と俗」、橋は「彼岸と此岸」というどちらも境界の象徴だからです。民俗学者の飯島吉晴氏は、橋などの境界について「此世と異界とのせめぎあうあわい空間であるとともに、此世にあって此世ならざる領域でもある。橋は異なる二つの世界を媒介する両義的な空間といえる」と述べています。

本誌2014夏号で紹介した「味噌買橋」の話にしても、自分の庭に埋まっている財宝を手に入れるために、わざわざ飛騨の橋の上に出かけてお告げを聞かねばなりませんでした。もともと「味噌買橋」は、イギリスの「スワファムの行商人」を翻案したものですが、原話もロンドン橋が託宣の舞台であり、和洋を問わず橋のような境界では、異界との交感が可能だと考えられていることがわかるのです。

（文：江口知秀）

浅野川に架かる梅ノ橋（石川県金沢市）